

# 詩史の時期区分と批評主体

——大江匡房「詩境記」からの展望——

## 緒言

文芸学の価値認識と批評の価値評価では意味が異なる。文芸史的意義を主な対象とする広義の美的価値認識に対して、文芸の価値評価という時、根拠の明示された批判ばかりでなく非難も多い。批評が現状の打開の意図につながっているからである。ともすれば創作者・作品に対する誹謗中傷に陥りかねないのを回避することが評価行為の喫緊の課題である。あわせて懸念されるのは、対象となる作品の提示する問題提起自体の重要性について享受者の認識が不十分な場合があり、作品の達成の結果・影響のみが要求される弊が大きいことである。評価行為の前提となる批評・評価主体は偏在的であるという認識の意味は軽くない。

一方で詩人として評判が高くなければ批評・評価主体としては貶められることすらある。批評という分野の開花が遅れたのは、創作者のみが尊重され、しばしば批評が創作に依存、従属していると見なされるからであろう。しかし、詩人群総体を見渡す位置にある批評家の見解は社会的責任を明示する記名とともに公表され、詩作へ還元される。それゆえにこそ事と次第によっては他の詩人や政治家によって危害が加えられかねない。以上を勘案するならば、批評主体は創作主体から独立している。

本稿では批評をめざした三詩史を通して批評主体のあり方、文芸史観の諸類型の意味を考察・展望したい。大江匡房「詩境記」に劉勰『文心雕龍』<sup>①</sup>、鍾嶸『詩品』<sup>②</sup>の影響が見られることからすると二者を関係づけるのは容認されよう。

## 一

劉勰『文心雕龍』では詩人が政治区分としての時代ごとに挙げられ評価がなされる。時代ごとの評価相互の連続性については格別の規則性を立てようとはしていない

渡 辺 仁 史

い。また個別の作品論もまだない。また、著者の前代以降になると評価は曖昧になり、当代の評価に至っては全くなされない。当代を論評しないというのは断代史の慣行<sup>④</sup>であろうが、前代を論評しないのはどう考えるべきか。中国魏晋南北朝の少なからぬ詩人が天寿を全うできなかったという政治的事情があるのかもしれない。<sup>⑤</sup>

『春秋公羊伝』の厳格さの反映という説もある。<sup>⑥</sup>同時にまだ無名だった劉勰が時の文学の重鎮である沈約に自ら関わり、同時に身の安全を考え時代に迎合・韜晦したという憶測もあろう。劉勰の体系的文章論における史的展望の中では当代に近づくほど評価が高くなる傾向にある。

その包括的記述にもかかわらず『文心雕龍』では陶淵明が選から漏れているのは、この時代「文章」と認識されていなかった「桃花源記」等について評価から除外しているのと相俟って文芸概念の時代的制約を示すものである。<sup>⑦</sup>『詩品』における

陶淵明の価値評価の意義については永田知之<sup>⑧</sup>にその系譜の具体的提示とともに言及がある。劉勰『文心雕龍』にやや遅れて登場した鍾嶸『詩品』は五言詩の史的展開について詩人の系譜を示すことで諸詩人の評価を大胆に展開する。当時の評価の高い詩人を暗に批判し、齊、梁時代への反発・忌避や、沈約「宋書謝靈運伝論」<sup>⑨</sup>「文選」の平仄の形式主義への嫌悪<sup>⑩</sup>（『詩品』下品序）もまた窺える。

いずれにしてもそうした担い手は近代の批評家の批判性、個の確立、すなわち過去を断罪し、現代的課題の萌芽を過去との断絶に求め、過去と同時代を把握し、一方で古典に新たな価値を発見して、切断しつつ現代に導入するのは異なる。そうした内省、断絶、創出、再編の行為に携わる批評主体は一個人として自らの偏在性

の質を提示しなければならない。非対称的な関係を生産性に結びつけるにはそれしかない。階層的貴族社会は現代という状況とは事情が異なるので、過去の批評を単純に批評主体の素朴さの問題に帰することはできない。享受者層の厚さもまた異なっている。

時代は下るが杜甫「戲為六絶句」<sup>(9)</sup>は同時代詩人を痛烈に批判する。杜甫は「風騷」(注『詩経』『楚辞』)以降、「屈宋(注 屈原、宋玉)」、あるいは「漢魏」に及ばずともせめて「齊梁」の後塵を拝すのをおそれるべきはずが「庾信」やそれに続く「楊王盧駱(注 楊炯、王勃、盧照隣、駱賓王)」の価値を認めずあげつらい、あざ笑う「輕薄」な者たちが多い、とこの詩群で風刺する。ここには尚古思想として『詩経』への回帰志向もある。また「戲」という、対象との一種の皮肉な距離を取る特性もある。批評主体としての鍾嶸『詩品』自体の評価もそうした後世の批評を視野に入れた文脈の中でなされるべきであろう。

詩人・詩作の価値評価は現代の文芸理論でも現代的主観性に依拠する点が多いとして慎重に扱われている問題である。評価主体の問題意識の偏差、内容美や表現美への拘泥といった、何にこだわり時代の規範・有用性に関わっているのかが問われることになる。他の評判と自己の実感のせめぎ合いという評価主体自身の不安もあるはずである。それはまた批評的権威との距離の取り方にもつながる。

魏晋南北朝という政治的に剣呑な時代にあつて一寒門が大胆に同時代人ともいえる著名詩人の評価を行う、当代に辛辣な鍾嶸『詩品』は批評が独立しているという意味で特筆されるべきであろう。『詩品』は詩人を系譜論的に認識する。そこには時間の中での連続と変遷を追う文芸史の萌芽が窺える一方、個の価値観をあらわにし、古代に厚く近代に薄いことも注意すべきであろう。先述したように梁初に死去した

沈約の詩作理論をその没後すぐに批評しているのはその顕著な例である。<sup>(10)</sup>その点で当代に厚い『玉台新詠集』とは相容れない。曹丕の述べる「文人相輕」(「典論論文」<sup>(11)</sup>『文選』)という指摘は政治的な意味も含めて、詩人は優位性を求めて一部の詩人を嫌悪・非難するという傾向を示しており、それは『詩品』の場合にも該当する。

そうした『詩品』の批評の位置づけを考える時、曹丕「典論論文」は朋友に面するよう同時に批評を行っているが、遑つて曹丕が権力者となりうるゆえに同時代

批評が許されていた可能性は否定できない。曹丕「與吳質書」(『文選』)でもすでに没したとはいえ同時代詩人の批評を行っているが、朋友という関係はすでに失われている。またその弟である曹植「與楊徳祖書」(『文選』)でも、より優れた詩句を追求してやまない情熱がそこでは強調されているが、それは彼の政治的立場を無視して宣言できるものではない。

魏晋南北朝の政情不安にもなう生命の危うさは近代以降の一部の国家・地域・時期とは様相がかなり異なることは考慮すべきであろう。それは自由と批評との密接な、かつ均衡が崩れやすい関係を想起させずにはおかない。「蓋文章経国之大業、不朽之盛事。」(曹丕「典論論文」『文選』)という時、文芸の批評は否応なく政治的批評とならざるをえない。批評に朋輩はいない。

## 二

批評主体の独立性について見てきた。ここでは詩史の評価は時期区分とも密接に関係していた。大江匡房「詩境記」の平安漢文学史の時期区分は以下のようなものである。

我朝、起於弘仁承和、盛於貞観延喜、中興於承平天曆、再昌於長保寛弘。

(大江匡房「詩境記」『朝野群載』)

その史観との比較として以下いくつかの詩史を提示する。近世の林鶯峰は次のように日本古代詩史を概観している。

本朝の文字風体、時を逐うて変替。『懐風』は其古詩に似たる乎。『凌雲』『経国』は唐詩を学んで盛美也。延喜・天曆の際、格調整齊して律体備矣。『麗藻』自り以下意到つて句到らず、其既に衰矣。『無題詩』自り以後、官家文字無し。(「九

月十三夜月を翫ぶ 藤原忠通<sup>(12)</sup>

「聖代」とされる延喜・天曆期を一体化させた古代漢文学史観を提示しているが、それ以外には政治的区分についての言及はない。評価としては人物、菅原道真の存在が大きいかもしれない。<sup>(13)</sup>また詩史の終焉も明確に規定されている。外的影響を意識しつつも詩の自律的「変替」に重きを置いた作品中心の詩史であろう。

一方、近代の岡田正之<sup>(14)</sup>は平安漢文学史を二分し「隆盛」と承平以降の「衰頽」と

する。また、川口久雄<sup>(15)</sup>は平安後期成立の「詩境記」を考慮しつつも便宜的に「形成・円熟・中興・分化、斜陽・解体」、「形成・中興・斜陽」の三区分とする。ここでは批評の現在には対象から距離を置く客観性をめざしている。また、それは「詩境記」と異なり大江匡房をも記述の対象とする平安漢文学史を意味する。すなわち記述主体の位置は後代である。大江匡房は「斜陽」期に位置づけられるはずである。以上の三著いずれによっても「詩境記」は衰退の認識の中に位置する作品ということになる。また、ここでは古典中国文学史には言及するが本朝の詩人の名も作品の具体的評価も見られない。それゆえ「詩境記」は断章ではないかという説<sup>(16)</sup>もある。

一般に文芸史の類型としてよく知られているのは唐詩の区分である。「初盛中晩」<sup>(17)</sup>は起源にはないが前半に評価の頂点が来るほかに停滞期を有し、そこから脱出する模索の時期があるとする詩史である。すなわち一つの文体は発生とともに大きくその可能性を開花させ、すぐに可能性を消尽させ消滅するというあり方を取るだけではない。すぐに消滅するものと緩やかに退行するものもある。なぜ可能性が全面的に開花し、その限界が見えたのに次の可能性の模索が可能なのかという点が重要であろう。岡田正之説、川口久雄説にはこうした観点はない。

始め、中間、終わりという時間の区分とは異なる史的展開は確かにある。「中」の場合、具体的には内容本位への変革、修辭の過多を排した平明化・復古への方向性の転換ということであろう。それによって修辭による固定的認識の流動化も視野に入ってくる。それはそれぞれの文体の構成的可塑性とも関係するのである<sup>(18)</sup>。

文体の盛衰の一つの類型の把握も一方にあり、尚古思想を伴うか否かの観点のほかに著述の現在に機軸を置いた価値評価となつているかも知重要な観点である。批評の現在の視座が明確に規定されているか否かは批評主体の偏在とそこからの詩史の偏差を明示する。大江匡房の時代では貴族の生命に危害が及ぶ言動というのはほぼ考えにくい。それはまさに平安時代の特徴であり、先述した中国魏晋南北朝とは大いに異なる点である。平和を尊ぶ時代の批評が緊張感に欠けていると裁断するのはなく、文芸がいたずらに政治的批評によって評価されてしまうことの難をかううじて免れた時期の批評が「詩境記」である。

また、勅撰三詩集の成立、白居易の詩集の影響を顧慮しつつ、嵯峨朝から詩史を述べるのも『方丈記』同様、平安京の始発を規定する共通認識がこの時期にあつたと考えられる。

「詩境記」は本朝奈良時代以前が除外された、価値評価に基づく四期区分の断代史的な平安漢文学史となっており、そこには記述主体である漢学者大江匡房自身の時代は次代として含まれないが、文芸史と批評主体を分離すると、空白期を含めこの詩史は漢文学の隆盛と政治的繁栄の時期区分が重なるという見解の表明となっている。一方でその詩風についての言及はない。

異論はあるが、あえて時期区分を意味づけると、新たな動向の形成を競う外的影響による「起」、修辭法の完備と文体の自律的展開により日本漢文学の可能性の開花に至る「盛」、停滞の時期を交えつつ文体の限定のもと内容面での充実・新たな可能性の模索をめざす「中興」、洗練・艶麗を庶幾しつつ、政治的成熟とともに個人的な達成を点在させてそこから集成へと向かう「再昌」、という類型をここでは指定することができる。「初盛中晩」という政治的時期区分よりも「晩」のない、類型としてより複雑な展開の時期区分認識が記述され、その文芸史観は「初盛中晩」とは明らかに意味が異なっている。当然、川口久雄の想定する類型である「始め、中間、終わり」と理解できる「形成 中興 斜陽」いう時期区分はより素朴な時間観念と見なされる。ただし、「中間」の多様化は時期区分の意味を変容させる。詩で言うところの排律のような構成となり、自由領域の長さの制約がない。ちなみに「詩境記」は断代史であるがゆえに当代である院政期の評価はないし、当代が「再昌」の延長に位置していると考える団円主義でもない。また、批評主体はここでは詩史から一応独立している。

評価がないのは当代を絶対化するのではもちろんなく、林鶯峰の指摘のように詩史の質的断絶であり、古典憧憬・尚古思想に依拠し、批評・評価主体が衰退期を間近に見たという悲観的認識による。具体的には大江匡房「暮年記」<sup>(19)</sup>寛治以降の件である「文を識る人、一人も存るものなし」という独白がそれを示している。取り残された彼の孤愁は隠しようもない。当代を漢文学にとつての末世とは認識する一方で自身の才質・力量については自負もある。

岡田正之は「詩境記」よりも具体的な大江匡房『江談抄』を「我が邦に於ける」

「始めて純然たる文史の趣」の作品と論評している。<sup>(20)</sup>『江談抄』の「文史」は詩句の日中比較を含めて詩句、作品、詩人の批評からなる。やはりそれは平安漢文学の衰退期の認識の下での批評であり、しかも自らの後継者がいないがゆえに生じた下降的意識に由来する批評である。ただし、自己の評価として「中古」<sup>(21)</sup>を超え、他の追隨を許さないという矜持がある。完結した平安詩史である以上、それは断代史でなくとも内容的に記述主体に責めは及ばない。衰退期でありながらも平安貴族にとっての「楽土」に彼は生きていたことになる。実際の詩史の批評主体としては孤高ではあっても自由の身であった。

大江匡房「詩境記」は時期的には保元・平治の乱の前夜に位置している。自己の立場を平安京の盛衰と一体化する自恃<sup>(22)</sup>は、しかし、主体の生命が脅かされる危険性のある危機における詩史認識とは次元を異にしている。ただし、そこには「洛陽田楽記」「狐媚記」「遊女記」「傀儡子記」といった「記」を通した、新たな時代を予感する市井へのまなざしが萌芽的に存在していることも見逃せない。

### 結語

文芸史の変遷の類型（収斂進化のような法則性ではなく、あくまでも評価の比較の基準としての類型）についてこれまで検討した価値意識による時期区分について確認する。林鷲峰説を市川寛齋説と同様と見なすと

隆盛 衰頹（岡田正之説）  
 形成 中興 斜陽（川口久雄説）  
 初盛 中晩（市川寛齋説）  
 起盛 中興 再昌（大江匡房説）

となろう。「初盛中晩」には「中」の意義的変容に特徴があり、多様な価値論が導入される。「起盛 中興 再昌」には終焉の意味づけの変化と記述主体の独立があり、記述主体の文芸史への始中終の埋め込みと重層的な文芸史的展望も可能となる。

一般に詩史の記述主体はその位置が見える危険にさらされやすい場合と断代史のように安全が保障されている場合がある。対象に当てはめるべき類型化された上述の四史観の選択基準の妥当性の判断は作品の価値認識と記述主体の視座との相関に

おいてしかない。断代史の記述主体はその時、次の時代の価値基準を通して見るこ

とが可能であるが、一方で批評を示すことはほぼできない。  
 劉勰『文心雕龍』鍾嶸『詩品』が当代について触れていないと同時に、先述の指摘のように同時代の『文選』では選集時の作品を優遇していることも時代ごとの作品数から判明している。古典中国文学の時代的変遷という観点は古典中国文学史の一認識である。

しかし、文芸史にとって発展や進化といった史観自体が認定を留保され、その妥当性を問われている問題であり、西洋近代史的進歩史観と同様、一概には採用できない。近代において魯迅は詩史に対して小説史を対置し記述することで詩史に偏重した一面的な文芸史観を批判した。<sup>(23)</sup>歴史的に発生する文体ごとの盛衰、文体相互の影響と混融を考慮すべきなのであろう。

文芸史の記述主体が文芸史において占める位置を文芸史の末尾に置くのか、時代との距離を大きくとって現代という視座から批判的に論述するのかわは意味を異にする<sup>(24)</sup>と先述したが、拙稿「平安文芸史新攷」で試みた時期区分についても記述主体の現在の立場によつて大きく意味を変えることを確認したい。それについては問いの場として拙稿「一般文芸学の可能性」<sup>(25)</sup>で言及したが、記述主体の偏差の定位は不可欠である。

以上で取り上げた詩史はそれぞれの時代情勢によつて言及の範囲を規制されてきた。それゆえ国や地域、民族、時代等を越境した時、以上のような指摘自体が批評家のみならず文芸史記述の主体の政治的・身体的危険性をいつでも伴いかねないことを失念してはならない。政治と文芸との距離が近づくほど相互の影響と軋轢は大きくなる。

### 注

(1) 一海知義・興膳宏訳 世界古典文学全集『陶淵明 文心雕龍』筑摩書房 昭和43・12 戸田浩暁 新釈漢文大系『文心雕龍』上下 明治書院 昭和49・11、53・6

(2) 興膳宏『合璧 詩品 書品』研文出版 平成23・8

(3) 後藤昭雄「大江匡房「詩境記」考」『平安朝漢文学史論考』勉誠出版 平成24・4 に指摘がある。なお、「詩境記」(『朝野群載』)の本文は同論文に拠った。

(4) 興膳宏「文選総説」興膳宏・川合康三 鑑賞中国の古典『文選』角川書店 昭和63・12 14ページ では生存者を批評しないと指摘されている。

(5) 目加田誠「文心雕龍」『文学芸術論集』平凡社 昭和49・6

(6) (1) 興膳宏解説参照。(5) 目加田誠注も同じ見解。

(7) (1) 興膳宏解説、(4) 所収「海知義」『文選』と陶淵明」参照。

(8) 永田知之「理論と批評 古典中国の文学思潮」臨川書店 令和元・6

(9) 下定雅弘・松原朗編『杜甫全詩訳注』二 講談社 平成28・7 唐以前の文学論については川合康三「唐代における文学史的思考(上)」『京大文学部研究紀要』37 平成10・3 参照。

(10) (2) 興膳宏『詩品』解題17ページ『詩品』223ページ「下品」解説参照。

(11) 内田泉之助他 新釈漢文大系『文選』明治書院 昭和38・10(平成13・1 小尾郊一・花房英樹 全釈漢文大系『文選』一(七 集英社 昭和49・6(昭和51・10 引用は後者に拠った。なお、(4) 興膳宏「典論論文」解説も参照。

(12) 林鷲峰 小島憲之校注 新日本古典文学大系『本朝一人一首』岩波書店 平成6・2

(13) 『江談抄』では菅原道真、白居易の評価は群を抜いている。後藤昭雄・池上洵一・山根對助校注『江談抄 中外抄 富家語』岩波書店 平成9・6 179ページ 180ページ参照。

(14) 岡田正之『日本漢文学史』増補版 吉川弘文館 昭和29・12

(15) 川口久雄『平安朝の漢文学』吉川弘文館 昭和56・11

(16) (3) 参照。

(17) 市川寛斎編 後藤昭雄解説『日本詩紀』凡例 吉川弘文館 平成12・

3 「初盛中晩」の唐詩四変説は巖羽『滄浪詩話』の「唐初体、盛唐体、大歴体、元和体、晚唐体」に由来するものとされ、詩体をもとに時期区分される。(9) 川合康三論文、巖羽『滄浪詩話』(荒井健・興膳宏 中国文

明選『文学論集』朝日新聞社 昭和47・5 解題の年表)参照。なお、断代史ともやや異なる「文体三変」については(3) 後藤昭雄273ページ参照。

(18) 『文選』では文体の時代ごとの作品選択数によって文体の選抜の盛衰が客観化できる可能性を興膳宏は指摘する(4) 興膳宏「文選総説」26ページ「文選序」解説40ページ)。それは詩と賦の時代的増減の数値という形式的な側面からであるがゆえに撰集の文芸史的認識を可能にする揺るがぬ一つの観点となると考えられる。

(19) 大曾根章介他校注 日本思想大系『古代政治社会思想』岩波書店 昭和54・3

(20) 「詩境記」との共通点については同一素材があることは(13) 199ページ参照。

(21) 『江談抄』は中古を評価基準とする(46ページ 211ページ)。「中古」の示す時期については必ずしも分明ではないが後藤昭雄等は一条朝を指すと推測している。江談抄研究会編『古本系江談抄注解』補訂版 武蔵野書院 平成5・5参照。

(22) (14) 岡田正之219ページ参照。

(23) 魯迅 丸尾常喜訳注『中国小説の歴史的変遷』凱風社 昭和62・7 なお、同等の分量の詩史として高橋和巳「中国詩史梗概」高木正一他『漢詩鑑賞入門』創元社 昭和37・3 がある。

(24) 渡辺仁史『文芸史の可能性』新典社 平成24・8

(25) 渡辺仁史「一般文芸史の可能性」『一関工業高等専門学校研究紀要』第54号 令和元・12

(二〇二〇年十一月十七日受理)